

得董集 止簡下亦

		一八九五	和書門
	二二	八	
四五	四	八	
冊	架	函	號類

庫	文	閣	內
三		一八九五	和書
四		八	
五	四	八	
架	冊	號	類

內閣文庫	
番號	和 18958
冊數	4 ( 3 )
函號	213 56

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

G Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak









骨董集上編後帙二卷目錄

下之卷本

- 毬杖一
- ぬりく付礮毒二
- 羽子板三
- 粥木粥杖祝木ちいたけ棒四
- れ乳母日傘と云諺五
- ひくろの名義ひくろの假名六
- 雛遊の始七
- 雛社雛合八
- 源氏物語の雛遊九
- 古書どもにんえゝ雛遊くさぐさ十
- ひのかれ調度十一
- 又十四
- ひのか衣十二
- 古製雛圖十三
- 伊勢小米雛十六
- 室町家の比れ雛圖十五
- 唐土鏝人十八
- 雛繪櫃十九
- 三月三日の雛遊十七
- 唐土鏝人十八
- 雛使圖二十一
- 雛椀折敷圖二十二
- 土雛圖二十
- 雛使圖二十一
- 雛椀折敷圖二十二
- 後の雛二十三
- 姫瓜雛二十四
- ひい草二十五

下之卷末

- 勸進比丘尼繪解一
- 端午茅卷馬二
- 端午頭巾袈裟三
- 糸縷とらんころもがら六
- 人形圖并考三
- 後妻打古圖考四
- 於国哥舞妓古圖考五
- 酸醬を吹かす七
- 小兒を愛するバブの八
- かくれあそび十一
- 比比丘女九
- 編笠古圖十
- かくれあそび十一
- 目比十三
- 目あざら軒のそぐめ十二
- 見世棚十五
- 虫のたま繪十六
- 宿世焼十四
- 子日れ雛遊贖物の比比奈十八
- 海老上臈十九
- 腰鼓兄弟二十
- 輪鼓十七
- 苜蓿田樂豆腐上物二十一
- 菅蒲曹再考二十二
- 板風呂湯錢風呂屋二十三
- 提燈再考二十四

骨董集上編下前頁









京都保物語 祭使卷よ云「野射

と後りどものこまよりして

すひのそびあつたのちとがわいある

玉を打つ後りどものめあのかみ

杖を

のそびまに今の本よき杖をまき

作るのやまわれり(按)四月の

作るのやまわれり(按)四月の

○打毬樂之圖



詞花堂模藏

け外は素人  
二人かき  
装束して  
たくり  
これを畧

よきまにの事

らこ舎人ども打毬樂の

丸一のそびら

玩具の毬杖の

とされば玩具の毬杖ハ打毬

並よりしよのらで打毬樂の

玉を打をまひた

そのおもゝ毬杖の玉とひ玉打もひいあらん打毬ハ鞠も玉の形

わらざればなり近古の毬杖の玉もまるたく玉の形寛文六年の訓蒙

裁る音中に玉を考へあり〇の騎射の後ありど打毬

樂を奏しりや源氏物語 螢の巻よ五月五日の節會よ騎射競馬を

かゝるれと後よ打毬樂落躰などの象樂のり」ととえたり

花鳥餘情

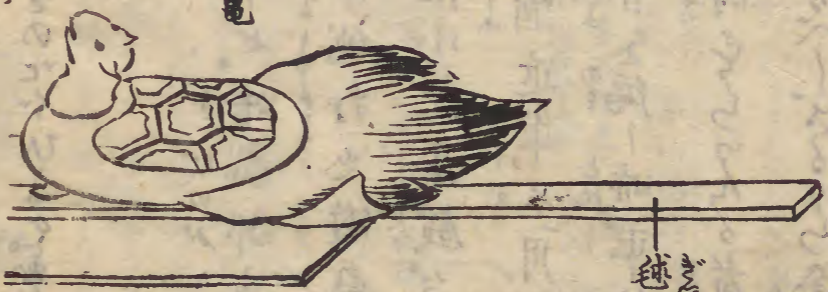
卷十四



正月の月をめぐらむるの次  
 の年の正月の男児をめぐらむる  
 女児の飾花をかゝる。醒まらぬ  
 花とりの宝曆以前ありしが  
 今なきものなり。一ツの巻  
 物なり。一ツの巻物なり。一ツ  
 の巻物なり。但此事をめぐらむ  
 るものなり。古俗を  
 承るもの希きなり。

○今制毬杖高

推し柄の端まき  
 〱〱〱曲尺一尺八寸許  
 土をつゝの紙を剪胡粉丹緑青  
 おもていろいろ。粗糲よつたる物なり。



毬杖の  
 推しの柄

滑稽雑談 卷之一  
 當代の  
 末の模様  
 幼児の遊び

板に貼る一鶴亀松竹と造て  
 正徳二年和漢三才會と同時の  
 撰當時くつたれば正徳の前  
 とぞよ今の此制よりしるべし。



毬杖の  
 推しの多  
 正徳神  
 人取  
 扇と鏡の  
 玉の  
 推しの多

○これ京師の人へ月をめぐらむる  
 昔より東国ありしもの  
 のあれはに其真を  
 うらゝあつたがよきと  
 かりぐの音も又さあり



中より。こし蚊をかきれーめんたけよ。こまのことしほき作らるる。林逸節用

集 明応ノ昏羽子板 胡鬼板 子 日次紀事 延宝四年正月の條云

野 兒 擊 毬 杖 玩 弓 矢 女 子 動 羽 子 木 板 弄 絲 毬 云々 又

十二月市中の賣物をあらうりる処に毬及毬杖部里と云々羽古義

板とあれば胡鬼板小作りの借字よく羽子木板の上畧吹羽子のことを胡鬼の

子といふも板の方よりうれたる名歟ともおもわれど。下学集以下の古書小羽子板

胡鬼板とあれば後の日次紀事を證として決ぐ。るや古書をたがひぬべし。

○こく 私可多咄 万治二年印本 田舎人京のわけて。この持あふ笏をうて。羽子板を

ゆえといひ。笑話を裁たり。これにうて。古制の羽子板の笏に似たり。今の笏は

中ぐへん形よのうどとかおもひ。三春羽子板といふをうて。うも笏に似たり。バ

其古制のあらうりあるをきれ。るやにせ。高をうて。るべし。

○北嶽山日光山の外諸別の高山よかあり。木の子さう。又たな。こ。玩具の羽子。形

藩の板 増山井 寛文三。さだら。と云。考。味見。考。

○礮毒圖

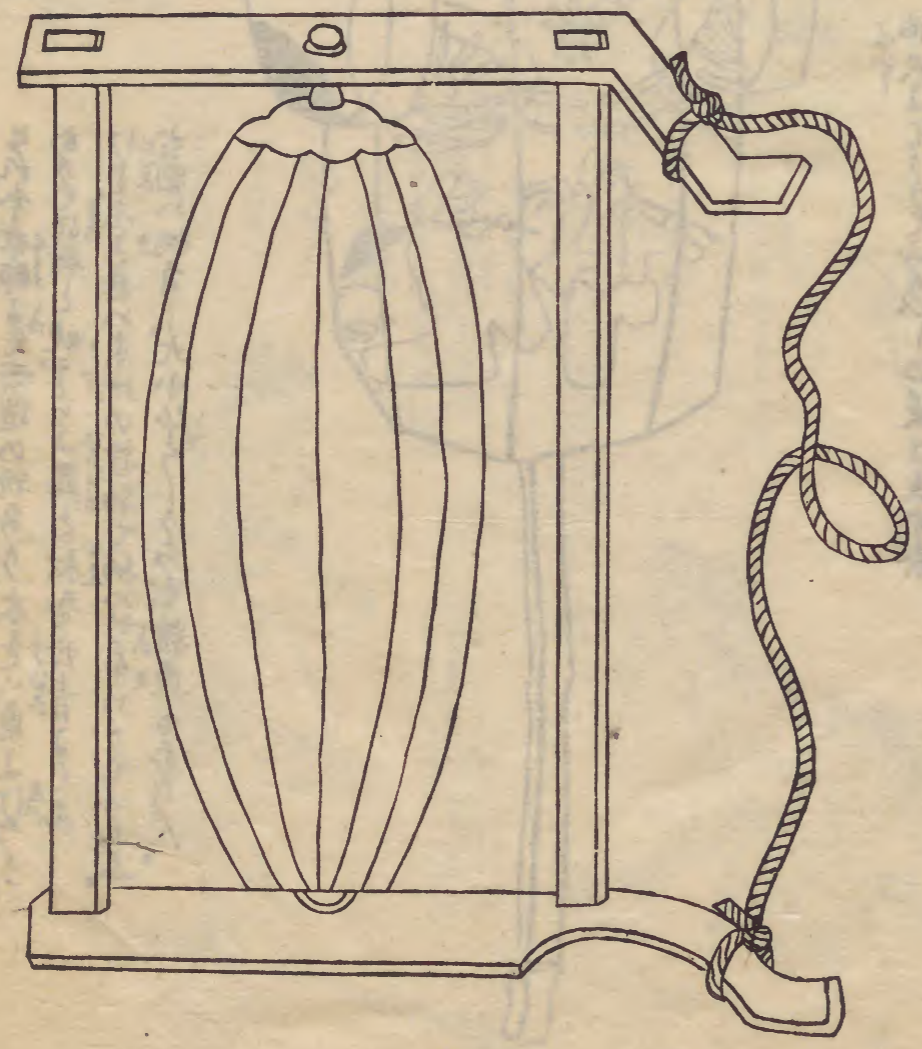
明王圻か

三才會

器用十一の巻

上此會を裁

和漢三才會 礮毒の會を 夷果五飲の 各よ。礮毒田番 也。本朝田家 味見。考。





明曆の比印行  
一休とさう

明曆四年印行  
京童



○がら／＼をりく持ぶ古童を  
あつちあつちとよき糸を  
つくと地をひき、体あり

貞享五年印行  
日本歳時記



玉い  
うら／＼とまたうら／＼

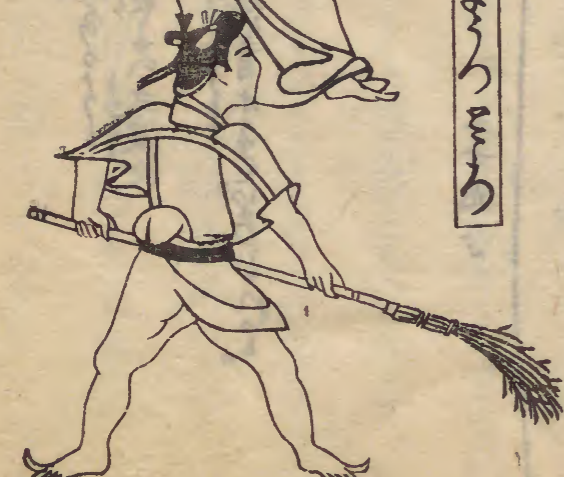
万治三年印行

世諺問答

此畵を以て縫杖とぶら／＼と別  
あるを知るべし

世諺問答の天文の  
古書あれども此絵は  
上木の時  
當時の  
さゆを  
かきたる

ひれは万治  
の地の證と  
ま／＼と  
た／＼と



あつち

骨董上編 下之前七

○おと／＼の音



曲尺よ／＼とぶら／＼の長さ五寸余  
柄の長さ四寸餘

これ今京師の巧造の物あり。木を八角より作り、  
ありとに耐と焼く。うら／＼と鶴と松を丹青の画  
けをえきおの本地の扱物の柄の竹をうら／＼と  
吉刺の柄あり。大小ひ／＼と、精鹿のあらん。



たむあるべきもあてひいて出給ひしりもゆるはぐり。いづりいづりいづりいづり  
りんをちりねのめとあよ人をたせんとまことさやうのめくれよ少将  
弁醒云。醒云考りて。治三年の。後深草院御年。うぐひしりいづりいづりいづり  
まぐち出給ひしりもあてひいて出給ひしりもゆるはぐり。いづりいづりいづりいづり  
たまふり。推一納ま。あてひいて出給ひしりもゆるはぐり。いづりいづりいづりいづり  
いづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづり  
あてねしりもあてひいて出給ひしりもゆるはぐり。いづりいづりいづりいづりいづり  
つりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづりいづり  
うららびぬかろくればはえあれが月とてめと名こそあてひいて

骨董上編 下之前九

物よええい下紐四の「十日粥の杖よ打古るで勅禁中今も粥杖よ  
女房をうての男子を生どとてうらと。越前あてひいていづりいづりいづりいづり  
不知也天正十八年 日本歳時記 貞享五刻 正月十五日の條よま「今日粥杖とて  
松枝柴あてひいて女の腰をうてのめをうてひまがひいとて今もゆるひあり。但  
今も小兒の戲事とありてまこと此函よの松の杖を五まよりとりてまことよて  
女を打呀あり。西函よの棒よて女をうらつ呀ありまこと。日次紀事 追加云信飛二  
等の函よ於ての漆膠木を以て其長サ一尺二寸許り切上下より削掛て先の  
方よ左巻取或ハ柳櫻花の如き物を紙よて切粘して松煙を以て曼を煙べ  
其取を取除ハ其模様白残る。曼を予て淨祝棒と云新婦の家毎よ入  
て新婦の腰を打児童の戲也云々」此記の延宝貞享  
造らぬ。明朝まぐちもまことえりるまや。日本風土記 卷之二 時令の條よ云  
元宵 正月十五。云々。但 街道郷村 児童。年及十五十八



九 已上者各取柳枝去皮彫成木刀杖を木刀と以皮復此説右の日記紀事  
外纏于刀上用火烧去皮以分黑白之花此説右の日記紀事  
名曰荷花蘭密子孫の多再取荊棘之條挿供香火神前追記の説は符合せ  
次集各童手執木刀隊闘于途凡有昏久無子之婦此説右の日記紀事  
將木刀一遍身打之口念荷花蘭密必使此婦當年有此説右の日記紀事  
孕生男云々と見えたりされ明入此方の事を傳へてうきたる昏あり○ついでいそん  
八養草貞享三年著卷之一 粥杖の半をたぎて云々今も北國のちよ枝の本として  
雷盆櫃のごとくある丸本に鶴亀松竹宝づの繪を彩色幼男ども  
いさぐ産せぬ新婦を打祝ひあり書言字考 粥杖・北越人  
謂之枝木年中風俗考 貞享四年印 正月十五日の所云々たののちの半  
大の子と云義也陰相を作りて童のりてのをびととて女を祝して大の  
そのと子を持ちたまへと云義也年中故事要言 享保三年 云々美濃國沭官の

村より正月十五日新杖を削て其削屑の縷の如くあるを杖の頭杖の頭に  
て名て削掛といふ是より女を答て大の男十三人といひ然ども其義を知る  
者あり是も男子を生てを求る祝と云ふあり杖の遺意あり ○さて下  
畚をせど地越を祝本と云ふげいしうへり傳へて今造る杖あるを勝軍  
本又勝の木 或は胡桃本と造り春初男兒ある方かろつりつりを餅花ともよ  
つ所掛並小正月よりして男兒らとをたがせて新婦あるをおのま  
新婦の腰を打まひびをて子をままひら又祝と彼地の方言  
小正月十四十五十六日をさして小正月といふふ不ようして祝棒とも削掛とも  
いふとぞこれ全く古代の由杖の遺俗あり日次紀事 婦人養草よりい  
とまりは是あり勝軍本と云い白膠本のことぞ

和訓栞 ぬのげきの条云々諸國よても新婦を述へ正月よりたきと  
新令りせの神宮のつりものあり云々









ゆゑにまた  
同巻 又云「雪山つらきを捨ててひさなるをびとめりてそのまを  
たてまつり給ふ」といふ所のひさなるをびとめりてそのまを  
りつとひさなるをびとめりてそのまを  
○雪山の巻のひさなるをびとめりてそのまを  
たてまつり給ふ」といふ所のひさなるをびとめりてそのまを

榮花物語

才八は河花の巻寛弘五年の

○才十四の巻寛仁二年

の春沖堂白道長又の沖子中将長家にて九年十又とありて此の  
しとらうくくよき此聲のありてよありて侍從中納言行成のひめ君

九年十二とありてあるをよきとありて侍從中納言行成のひめ君

らありてありて侍從中納言行成のひめ君

○才十九沖堂着の巻治安三年の條

天の巻のかまひびめ

よはぐのありてありて侍從中納言行成のひめ君

をばらうとありてありて侍從中納言行成のひめ君

うたへありてありて侍從中納言行成のひめ君

給つ物うらまへ○才八若水の巻よ云「このまのひめ君のうらまへ  
しを給をえれば」中畧 此のうらまへを  
ひめ君のうらまへを

から給へりてありて侍從中納言行成のひめ君

ありてありて侍從中納言行成のひめ君

大内へありてありて侍從中納言行成のひめ君

ちありてありて侍從中納言行成のひめ君

のありてありて侍從中納言行成のひめ君

給をえと

増鏡

才

三神山の條仁治二年

四條院

八十六

代帝 沖年十一

は元服しぬ故撰政教実公の姫君九才よりありぬか女所よまありぬ女所  
きいたの事さるるあよ「女所よまありぬか女所よまありぬか女所  
中うもぞええさを結ひける。云々」  
源氏をのこし比ふりに治の事まむとあむれはかむと二百三  
四十年をうり後あれど当時のひまはむれはかむと二百三  
それらの文どもをかひひきつていふてひひまはむれはかむと二百三

○離の調度 十一

紫式部日記 上 東門院皇太子を産めひ一事をとりて云々「ワラ宮の法

まろあひひ一納言の君ひんぐにまありさるるちひさたれだひはさらどもは  
のだひさるるあまもひひまはむれはかむと二百三  
枕草紙 さらしあひひ一さるる

あれたるあひひひひまはむれはかむと二百三  
調度 調度 調度

濱松中納言物語 二の巻云「ほごりのあひひひひまはむれはかむと二百三  
よきんごんにさるるまありぬか女所よまありぬか女所

骨董上編 下之前十六

どもよひひまはむれはかむと二百三  
調度 調度 調度  
管素

○ひひか女 十二

あけうの日記 下の巻云「けあむるあむもさるる心かおととあむる人の物

まうごらるるさるるあむもさるる心かおととあむる人の物  
たもさるるさるるあむもさるる心かおととあむる人の物  
さるるさるるあむもさるる心かおととあむる人の物  
らるるさるるあむもさるる心かおととあむる人の物

まきす 又え

あら夜あれしほむさるるあむもさるる心かおととあむる人の物





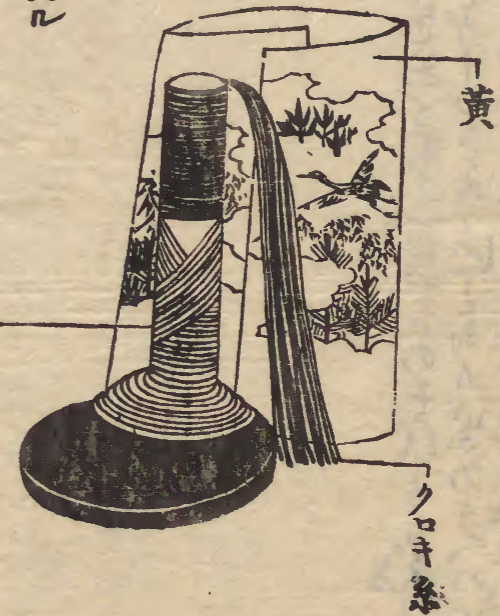
古制衣雛又一種 十四

四国のうち此古制のこれる  
 一ははるりむ由意外一はく  
 あつらひはるりむ由雅致の  
 おこられも又珍重とす



紙に書きた松竹の繪をまき  
 丹をまきしうらうらひのうらひ物  
 なくまきしうらうらひのうらひ物  
 とをこれ衣服のうらひのうらひ

雛女



高サ曲尺一尺二寸をくり  
 黒き糸よくまけたらハ髪の色  
 らうらひのハ髪の色をよくまけたら  
 たるは衣領のうらひのうらひ  
 男かひまはうらひ糸をうらひ  
 女かひまはうらひ糸をうらひ  
 めく男女をうらひ  
 大小異同精踏のうらひ

寫山楼所藏

室町家の比の雛合 十五

ひらまらけさうひらまらけ  
 室町家の比の  
 ひらまらけ  
 伝来の  
 ぬき  
 あれど  
 らうらひ  
 らうらひ

高サ約  
 三寸  
 五分余



同背図



時得庵所藏

袴を長く  
 ひくこれの  
 たるは衣領の  
 うらひのうらひ

袴のうらひ  
 たるは衣領の



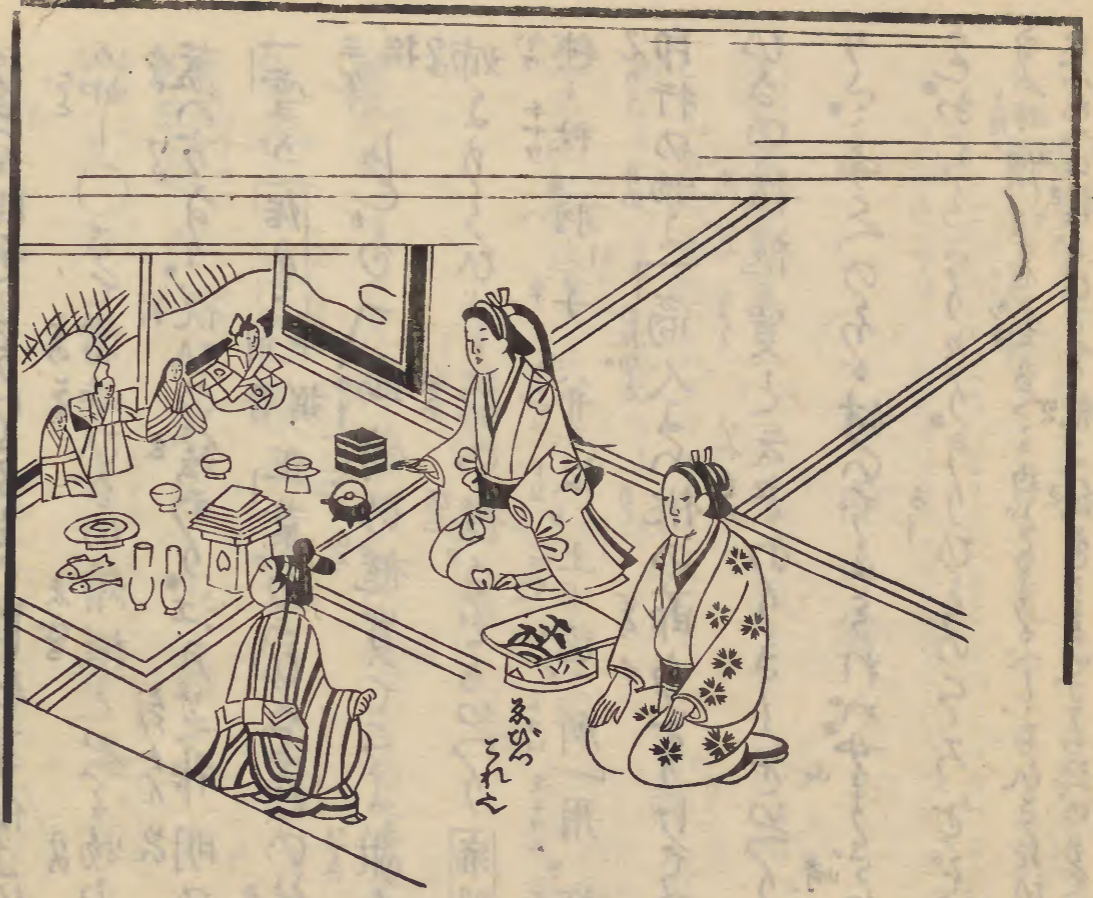






貞享五  
年印本

日本歳時記に載る雛遊の畵



元禄元年印本  
女用訓蒙畵  
載る  
絃櫃の畵

雛道具



當時のひなまつりの  
段をまうりどなたが座上  
ま物てとまらぬの  
まもの質素とまうり

骨董上編下之前二三

元禄十年印本  
鳥居清信が  
ゆける後  
のちらよけ畵あり



實延二年印本  
新托の記に載る  
絃櫃の畵



按るに  
道子紙ひらき  
あつた  
今ゆい  
まてお  
りどそれ

享保十七年印本

女中風俗玉鏡に  
載る  
かんの  
一段を



ゆき  
ゆき  
ゆき  
ゆき  
ゆき

諸国奇遊談

寛政十一年刻 一 絃櫃のりをとるる所

今も洛北の村里より三月の節白まで

必用ふ予が幼時 宝曆のまゝに於ても

用ひも多二月の末より賣りのきり

うらふ今になえてえあらしど今畜

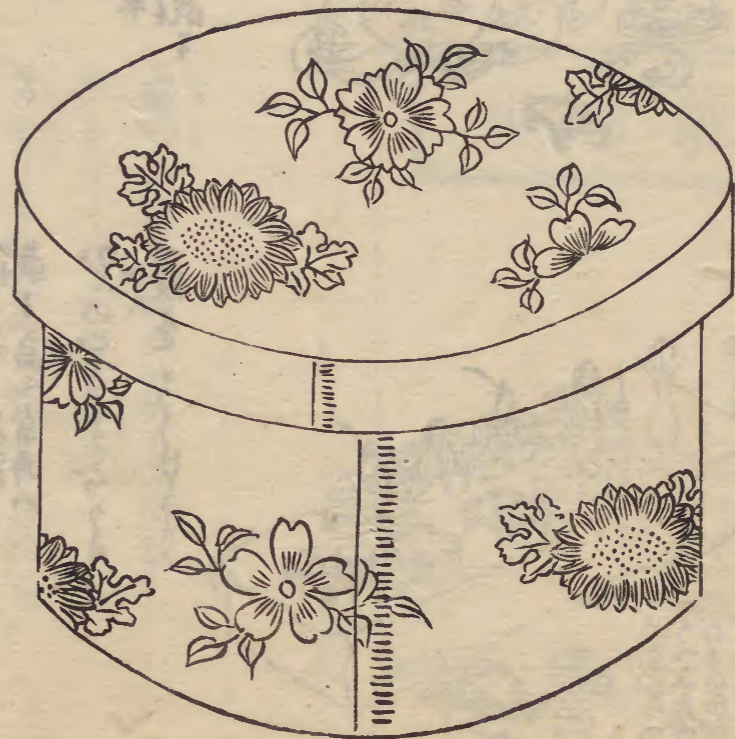
とる遠國又洛北の今の形を

こふとと」とりひて此畜をせり。

○醒 按るよ此絃ひつゝ櫻と菊を

やするい三月のひると九月の後のひると

うたはる後あるべしとれ辺世の制あるれがまじい。



○享保の比の土雛畜

二十



男 高サ曲尺 五寸分

緑青

ゆんろりの 中子い

丹 左口を 料の

尚志堂所藏



まて土をりくほらと焼て胡粉丹緑青  
あどとくしうらあの色あり  
かうと享保の後の物とせん  
深草やまのやあせん  
ひの質素と  
えのたれり。

今も深草  
内裏ひるを  
つう田舎  
うらそれ  
りらふ  
とど

今も田舎の女子生れくすめらの三月の節白江戸の今戸焼の土ひるを  
祝ふよとくりに古俗の田舎よのそれり。奥列の田舎も土ひるをあらふとせん。

○雛のついで 三十二

ひろく物語 あつひに往 よ云「昔の二月云々」  
 女の雛抱とてひろくをとり食事をそとく  
 いろくの黒諸道具をわたり草餅を  
 ひろくのついで入醴を揚入小蛤ホを  
 ひろく節白の礼とてひろくを系物よのせ  
 移すの拍で親類へ悉くついで是  
 成人の時嫁入して世帯持の替古あり  
 當分のあそびひろくを「あひる」と此高よ  
 ろのついでひろくのついでひろくのついで  
 中の品よりあそびひろくのついでひろく  
 ひろくの雛をあそびひろくをひたり今もあそび  
 五ヶ節白あそびひろくをひろくひたり  
 今朝食鑑 元禄八撰「白酒云々」  
 俗三月三日 爲節物供雛  
 祭とあれはあそびひろくも白酒をも用ひたり  
 元禄十六年印行

俳諧日本国

○天和貞享の比叢川所宜がわける  
 年中行事の印本よ此高あり

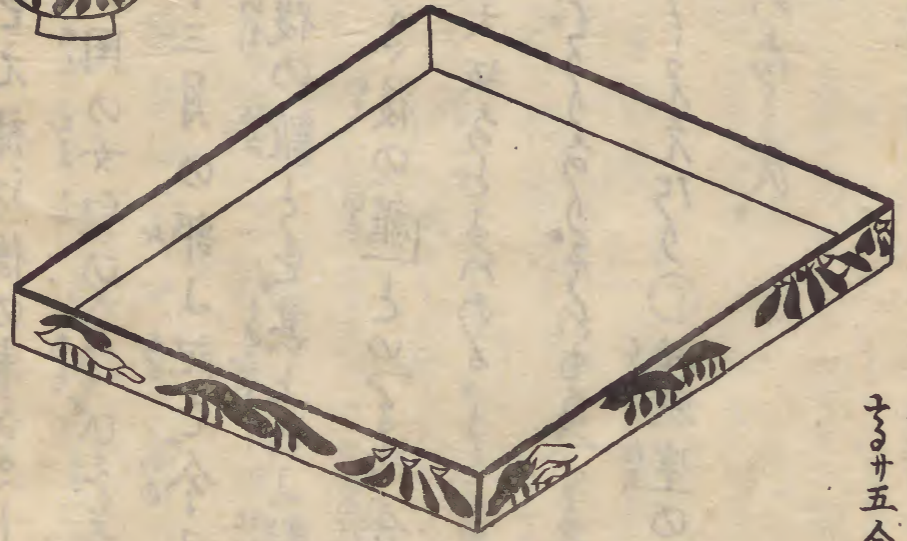
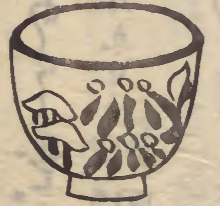


あや 興ゆきまのうのありがさ  
 付白 雛のついでの酒の弱足 布名

○雛 椀折敷圖 三十三

椀へ挽物の本地あり折敷へ片木の  
 せきりのついでひろくの粗糲よほくま  
 られも本地あり丹緑青よて松竹の  
 後あり京師あり明和安永の比  
 ま心ありひろくはひつこ  
 かろく古た物よそあそび  
 質素よそろく雅致あり

椀 一分余  
 ひろく 五分  
 折敷 五分



折敷方三寸三分  
 三寸五分

京都青李庵藏



○後の雛 三十三

後の雛の事古き物よいまもえあつてとぞ。元禄以後の事あるべし。滑稽雑談

止徳三 卷十七よ云「後の雛 九月九日 和国の女兒ひるおびをあるとみ古き

物語ももゆり上巳の節よ授めり三月の部よ記を今又九月九日よ

賞する女兒多し云々俳諧是を名付て後の雛とぞ其上巳よ對して謂る也」

晋子十七回 享保八 宗物のよとてあるき後の雛」とりる附合の句ありされば

正徳享保の比のどぞよのし事今由京大坂あどよのりありあれど三月の

如くさるまのど雛を二ツ出してあつたりありそれもあるてよあらざとらん

吾山が朱むらさきよびづの塚ものりありえたり○播別室の辺あり八朔よ

ひまを立る所ありと或人しよ其実否のあつべし

○姫氏の雛 三十四

姫氏の漢名を金鷲蛋とりの形鷲の卵よ似たれり元禄のあ後女兒

骨董上編下之前二十六

それを雛よはつて平日に多く抱びたることありき **雍州府志** 貞享三刻 姫氏、九條の

田間より出其大さ如梨其色至て白一故に姫を以て之を梅ど女兒斯氏を求め

少莖を留め白粉を其面よ傳墨を以て鬢髮眉目口鼻を畫き水引を以

て其莖よ結び揚擗て玩具とらん **和漢三才會** 卷 按よ姫氏云々小兒之

を取て眼鼻口の狀を畫き以て翫とぞ故小俗姫氏と名す 以上二會とも漢文

**五元集拾遺** 千氏やわらういよも黒き顔 柳ノ草紙よ「わら

うたれいのと古た事あり 枕ノ草紙よ「わら

うたれいのと古た事あり 枕ノ草紙よ「わら

うたれいのと古た事あり 枕ノ草紙よ「わら

うたれいのと古た事あり 枕ノ草紙よ「わら

うたれいのと古た事あり 枕ノ草紙よ「わら

うたれいのと古た事あり 枕ノ草紙よ「わら

うたれいのと古た事あり 枕ノ草紙よ「わら

うたれいのと古た事あり 枕ノ草紙よ「わら

うたれいのと古た事あり 枕ノ草紙よ「わら

こよほける心のくせもたがひどこれの心よ人の教うきたるものなり

山城久世氏云

〇ひい草

二十五

今のきの女童ひい草を採て雛の髪をゆひ紙の衣服を蒸すものごと

平日の玩具とてこれをもとをなすあり丹後守の忠臣家百首契久彦・源仲正わが

撫撫こころをさすひい草をりりり採ひぬていふあれり

今俗言ノツメルト云ニ通ハス

按るに仲正源三位頼政卿の父とて堀河院の比の哥人あれは今文化十年よりかゝる七百

二三十年より前ワのひい草とて採ひたるものあり律とさるになれり古れらるるを

りゆふの民の童のひい草を採ひ彼の此の草のたぐひとあり古代の童のり

採ひ物とて別つつとて賣りゆふれり今も田舎の童の採ひ物とて採ひ今も田舎の童の採ひ物とて採ひ

〇筆のついでとて貞享三年著婦人養草一巻船よりの一對をのりて海上をりる風波の

うれひとて貞享四年創年中風俗考安永のひい草

骨董集上編下之卷前終

